

令和7年度 事業計画

1. 情勢と方針

神津牧場のビジネスモデルはジャージー種牛の放牧飼養を生産の中核として、生み出される生乳を付加価値の高い乳製品に加工し、販売するとともに、放牧によって生み出される優れた景観を一般に開放し、消費者理解を得ながら、牧場の持つ資源を顕在化させるという付加価値を高める 6 次産業化モデルである。

ポストコロナ時代の牧場を取り巻く情勢は急速に、大きく変化している。新型コロナの流行は人の流れが停滞し、経済が混乱したが、その後におきたウクライナ戦争は輸入飼料の供給不足や円安のもとでの原材料や資材価格の高騰が起きた。輸入飼料の高騰は高止まり状態が続いている。ガソリンや電気などのエネルギー価格も高騰が著しく、補助の打ち切り等によって影響が顕在化している。さらに、この影響を受けてダンボールなど各種の資材や原料の価格の上昇が断続的に続いており、コストの上昇を招いている。

また、人手不足と働き方改革、最低賃金の上昇、有給休暇の取得推進などにより人件費の高騰が続いている。牧場でも 8 月に牛舎の若年職員が退職し、本年 3 月にはベテラン職員が退職する。夏から募集をかけているが、以前に比べて応募者が極めて少ない。初任給の上昇が著しく、中途採用も含めて、就職時の賃金に対する関心が高く、採用が困難になっている。最低賃金の上昇は人件費全体の上昇にもつながる。また、インボイス制度や人手不足を背景に、取引先などでデジタル化が急速に進んでおり、pcの各部署への配置や更新などの対応を迫られている。

こうしたコストの上昇は価格へ転嫁できればよいが、現在、乳製品は全国的に生産過剰とされ、売り先が消費者のため、価格転嫁は容易ではない。しかし、価格転嫁に求める他はなく、2 月より 10%の価格改定を行った。

これまで、牧場ではコロナ下での厳しい経営を乗り切るためにコロナ融資と人員削減による人件費の抑制で乗り切ってきた。しかし、コロナ融資の返済が本格化し、製酪工場建設時の負債の返済も加わるなどこれまでにない厳しい状況となっている。このような状況を打開するためには、土地の売却や返済の繰り延べによる返済額の平準化や寄付、新たな融資、新規事業の開発など早急に行わなければならない。

原料、人件費等のコスト上昇に対する対応

- ・ 資材、原材料の値上げが続いている。飼料価格の高騰はやや収まったものの高止まり状態である。このため、不要な家畜を減らし、飼料の節約などの対応を一層進める。また、人員確保と人件費の高騰に対応するために、必要に応じて商品の再値上げを行う。

販売の強化

- ・ 売上の半分を占める卸販売はほぼコロナ前に戻ったが、5 月、8 月の繁忙期での売上回復が課題である。このため、イベント等の客寄せ宣伝に務める。

- ・ ロッジの売上、特に食事や鉄板焼コーナーの低迷が続いている。イベント等の広報に努めるとともにミニイベントなどを企画して販売促進に当たりたい。
- ・ ギフト販売では郵便局のふるさと小包の販売が低迷している。期待が持てるのが、ふるさと納税の返礼品である。下仁田町と連携して返礼品の強化を図る。
- ・ この他、新たな取引の開拓に務める。

広報宣伝

- ・ これまでも行ってきたことであるが、メディア等を用いた宣伝はコストパフォーマンスの高い宣伝である。今後も機会を積極的に捉えて実施したい。
- ・ 現在、ホームページのブログや X(旧 Twitter)での発信を行っている。これらの SNS 利用はマーケティングの面からも効果が高いので、今年も積極的に進める。
- ・ 菓子などの原材料として牧場産の乳製品を求める要望が続いている。原材料としてではなく、「神津牧場の〇〇を使った・・・」との宣伝効果を期待してのものもある。販売だけでなく宣伝媒体ともなるので、今後も連携して積極的に進めていく。

イベント・体験

- ・ 花まつり(5 月第 2 日曜日)、もみじ祭り(10 月第 3 日曜日)は地域の行事としても定着しており、期待も高いので、コロナ以前を目指して開催をすすめる。広報宣伝に務める。
- ・ 体験イベントとして「乳しぼり」、「お散歩ヤギさん」、「牛追いツアー」などは人気も高いので積極的に行う。
- ・ 牧場主催の宿泊型牧場体験教室は 6 回程度行う。また、親子だけに限らず、大人にも広げていく。
- ・ 小学生、中学生向けの団体の体験は可能な限り受け入れていく。
- ・ 地域のイベントにも積極的に参加をしていく。

牧草・家畜生産および乳製品加工(施設等の老朽化)

- ・ 生産基盤である牛舎施設及び生産機械の老朽化が著しい。ここ数年で、ダンプトラックの更新やホイールローダ、ボブキャットの修理、ロールベアラーの更新を行った。トラクタも耐用年数を超えており、更新が必要となっている。昨年 12 月にチーズ熟成庫が壊れたため、チーズ生産は休止せざるえない。搾乳施設も飼料の配送システムの老朽化による故障が相次いでいる。老朽化はいたるところに及んでいる。
- ・ シカ被害は高額に及んでいるので、対策を実施する。①群馬県によるシカの捕獲事業で、現在、順調に進められているが、年を追うごとに捕獲頭数が減少しており、捕獲事業開始当初は 200 頭であった捕獲頭数が 100 頭以下に減少している。しかし、出現頭数は高止まり状態で、牧草被害は軽減していない。捕獲実施の猟友会の話では「シカが利口になった」とのことである。今後も捕獲実施者の猟友会、モニタリング調査の榊野生動物調査事務所、シカの生態調査を行っている麻布大学や農研機構とも協力して、対応する。②自給飼料の確保のため本年は麻布大学と協力して、2025 年度日本中央競馬会畜産振興事業「電気柵を用いた獣害に強い放牧畜産体系の構築・実証」に応募している。電気柵を利用してシカの行動を制御して、再送の被害軽減や、捕獲頭数の増加を図ろうとするものである。

牧場の多面的機能の拡充・深化

- ・ 広大な草原は開放的であり、森林の多い我国では保健休養機能が高い景観として評価されている。さらに大型動物や水辺景観の存在が加わると保健休養機能をさらに高めるものとされている。放牧を核とした家畜飼養を行っている神津牧場は山岳地帯にあり、387ha の広大な土地に約100ha の草地を有している。草地以外の約 280ha 弱の土地はほとんどが天然林である。これらの林はかつて薪炭林として利用されていたが、現在では全く利用されていない。こうした天然林も 2022 年から地球温暖化対策として、炭酸ガス吸収源としての森林の役割が評価され、排出権取引(J クレジット)の対象とされた。牧場の天然林も CO₂ 吸収という機能が評価される道が開けてきた。
- ・ 1 昨年、牧場の林には天然記念物の「ヤマネ」が生息していることがわかった。人工巣箱の設置により、観察も可能であることから野生動物調査をしている麻布大学と連携して、自然観察の素材となる可能性を検討する。

2. 事業に関する事項

<公益目的事業Ⅰ:ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業>

1)ジャージー種牛の飼養

(1) 草地管理及び飼料生産

- ・ 循環型畜産を基本とし、循環型の草地管理と自給飼料生産を進める。
- ・ すなわち、採草地は家畜排せつ物と廃菌床を原料とする堆肥の散布、放牧地は尿素等の購入肥料により、生産を維持する。
- ・ 放牧家畜の配置は従来通り本部地区、肥育素牛の放牧は峠地区、育成牛放牧は桶萱地区とし、本部地区では高栄養の牧草供給のため、短草利用と季節生産に対応した兼用利用を図る。
- ・ 牧草地はシカの食害が著しく、群馬県の捕獲事業とも連携して、フレキシブルな兼用利用をおこなっているが、必ずしも十分な効果を上げていない。捕獲時期が、秋に限られているため頭数抑制効果が弱いものと思われる。
- ・ シカ被害による牧草収穫不足になることが最近常態化しているため、次善の策として地域資源の稲WCSの調達も行う。
- ・ 草地の老朽化も進んでおり、計画的な草地の更新も必要となっている。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

- ・ これまでの共同研究や草量調査から 10 月以降の放牧地からの栄養供給が不足となることが明らかとなった。さらなる放牧地の集約利用法を試みる。
- ・ このことから10月以降の放牧方法や放牧地植生の改善のため、兼用利用を含めた放牧地の利用方法や施肥管理を改善する。
- ・ 東京農業大学との共同研究の成果をとりいれて、能力改良を進め、牛群検定などの結果を有効に活用し、繁殖管理の徹底、選抜淘汰の実施により、産乳能力の向上を図る。

- ・ 和牛の受精卵移植による子牛生産・販売(5 ヶ月齢)を行ったっている。技術確立と評価も安定してきた。さらに飼養管理などの技術改善を進め、販売を強化する。

(3) 放牧受託(公共育成牧場)

- ・ 4 月下旬から 10 月中旬までの夏期預託放牧による公共育成牧場事業を行う。
- ・ 家畜保健衛生所の協力を仰ぎ、衛生管理と繁殖管理を重点とし、人工授精技術の向上に努めて事業を遂行する。
- ・ 近年、受託農家が減少しているが、受入可能頭数は50頭程度であるので、農家へのアピールを積極的に行い、受託頭数の増加を図りたい。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発

(1) 乳製品の利用・加工技術の開発

- ・ 神津牧場ではチーズ、パック牛乳、ヨーグルト、ソフトクリームについて独自 技術による製品化を実現し、神津牧場ブランドを確立している。
- ・ 消費者のニーズの多様化対応してはちみつバター、モッツアレラチーズ、ストリングチーズ、スパイスチーズ、サラミケーゼ、トマトアンドバジル、下仁田ねぎチーズなどの新商品の開発を行ってきた。特にチーズは Japan Cheese Award (日本チーズプロフェッショナル協会主催)や国産ナチュラルチーズコンテストで賞を受賞している。
- ・ 今年は、熟成庫の破損により長期熟成のチーズは生産を休止せざる終えないが、モッツアレラチーズなどのフレッシュチーズで補うこととする。

(2) 肥育・加工

- ・ 放牧牛肉は、おいしさの成分や各種の機能性成分、オメガ 3 脂肪酸を多く含むことが明らかにされてきている。神津牧場ではジャージー牛の 2 シーズン放牧肥育による赤身肉生産を行っているので、この特徴と肉製品のうまさの積極的な宣伝し、放牧牛肉の市販に繋げる。
- ・ 廃用雌牛肉の加工品やレトルトなどを開発して販売チャネルの拡大(ふるさと納税返礼品)を図っていく。

(3) 放牧養豚

- ・ 豚熱の国内での発生と野生イノシシの豚熱の感染拡大が続いており、今年も牧場での放牧養豚を中止する。

(4) 実習生・研修生の受入れ

- ・ 神津牧場の特徴は放牧飼養、生産から販売まで一貫通貫で研修できるところにある。今年もこの特徴を生かした研修プログラムを実施する。
- ・ 畜産後継者の研修として、農業系大学生、農業大学校生、動物専門学校生を対象とした実習生を中心に受け入れる。なお、今後の担い手を育成する観点から長期の研修者を優先して、受け入れを行っていく。

(5) 乳製品の卸販売

- ・ 乳製品の卸販売は牧場経営にとって中核となる事業である。牧場で生み出されるジャージー牛の生乳やジャージー牛肉を原材料とした乳肉製品を高価格で販売して行くことが真の評価

につながり、最終的な付加価値の高い6次化産業モデルとなる。

- ・ このため、「日本最古」、「放牧」、「ジャージー牛」、をキーワードとしてブランディングを行い、消費者ニーズと商品と販売チャネルの対応を明確にして、商品開発と販売戦略の構築を図っていく。
- ・ このことにより、場内の売店のほか、各地の道の駅などの販売強化につなげて、牧場の財政基盤の確立にも努める。
- ・ また、贈答商品の販売チャネルとして、郵便局、デパート、ギフト業者等との連携を強化するとともに、インターネットを通じた販売やギフトに積極的に取り組む。
- ・ 各地で開催されるイベント等に参加して消費動向の把握や地域連携を作っていく。
- ・ また、牛乳・バターは製菓・パンの原料としての需要も強く、素材としての利用など新分野の開拓を試みていく。

(6) 外部機関との共同研究事業

(共同研究の実績一覧は後述の＜参考＞を参照)

- ・ 麻布大学の野生動物研究室、農研機構、NPO 法人アースワームとの共同研究として、シカの被害対策として、長期の個体数調査を行っている。また、麻布大学とはアナグマの生態調査などを継続して行う。
- ・ 新たな研究として、日本中央競馬会畜産振興事業の研究開発事業に「電気柵を用いた獣害に強い放牧畜産体系の構築・実証」を応募している(審査中)。
- ・ 継続研究としては「ドローンによるシカ個体数調査手法の開発」、「天然記念物「ヤマネ」の生態調査」を継続する。成果は獣害防止とともに自然環境教育の材料として、体験学習などに利用する。

＜公益目的事業Ⅱ：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業＞

(1) 牧場体験および緑資源の高度利用

- ・ 神津牧場は「妙義荒船佐久高原国定公園」の中核に位置し、群馬県に生息する大型野生動物12種のうち10種が確認され、豊かな自然が形成されている。この豊かさは森林と草原がモザイク状に配置された景観にある。放牧により形成される草原生態系は独特な動植物を育む場となっており、生物の多様性を育む基盤となっている。これらの自然資源や牧場資源はグリーンツーリズムや保健休養機能として、多くの人に親しまれてきた。今後も体験学習などをおして、牧場の自然を積極的に展示・発信を行っていく。
- ・ 具体的には「家畜飼養管理基準」に則って、畜産理解醸成を図るべく酪農教育ファームとして、これまで整備された施設を活用し、幼稚園から大人までを対象に広げて、日帰り型あるいは宿泊型の牧場体験プログラムを充実させていく。日帰り型では乳搾り体験、ポニー乗馬、お散歩やギンさん、牛追いツアーなど土日を中心に体験プログラムを充実させてきた。また、今年も小学校の移動教室等に対応したプログラムを行い、畜産理解を高める。宿泊体験では「親子牧場体験」として、草食家畜のエサとなる牧草の刈り取り体験、刈り取った牧草の給与体験、子牛の哺乳体験、搾乳牛の乳搾り体験、放牧家畜の観察(ガイドツアー)、夜の牧場探検(夜の家畜の観察)、バター作り、牛肉の燻製づくりの畜産物製造体験など様々なプログラムを作成して畜産の理解醸成を図っていく。

- ・ 体験プログラムづくりには外部機関との共同研究による野生動物の調査手法を活用しエコツーリズム事業にさらに発展させていく。

(2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成

- ・ 動物とのふれあいは多くの国民のから期待される場所である。動物とのふれあいに資するためポニー、ウサギ、山羊等の飼養展示を行い、飼養管理基準に留意しつつ、積極的に動物との接触体験ができるように工夫をおこない畜産の理解醸成に努める。
- ・ 情報発信の手段としては昨年設置したミニ資料館で牧場の歴史的資産などの公開や、牧場の歴史、牧場での飼養管理の説明を行い、牧場に対する理解を深める。
- ・ また、ホームページを核として、SNS(X,Facebook,Instagram)を利用して情報発信をするとともに、下仁田町や下仁田町観光協会、佐久振興公社と連携、その他各種媒体を通じて地域情報と一体になった宣伝にもつとめ、妙義荒船佐久高原国定公園の中核としての役割を果たす。
- ・ 隣接地には世界遺産の構成資産である「荒船風穴」があり、牧場からの集客を期待されている。そのため、今年も風穴事務局と連携した取り組みを行う。

<収益目的事業>

- ・ 神津牧場ロッジでは来場者に対し、飲食、宿泊、売店の営業を行う。物販は牧場の生産物を中心に特色のある品揃えを行う。
- ・ 「道の駅しもにた」の神津牧場ミルクバーでは物販と喫茶の営業を行うとともに、神津牧場の宣伝を通して、公益目的事業の強化と下仁田町の地域活性化に資する。

<参考:令和 7 年度における外部との共同・協定試験研究(○応募、◎継続予定、●は終了済)>

○ (応募:審査中)麻布大学(塚田)

- ・ 2025 年度日本中央競馬会畜産振興事業「電気柵を用いた獣害に強い放牧畜産体系の構築・実証」

○ 東京大学地球規模感染症制御学講座(松浦)

- ・ 品種に基づく牛伝染性リンパ腫全国疫学調査事業(協力)

◎ 野生動物被害対策調査:麻布大学(塚田)、農研機構中央農業研究センター(竹内・秦)、NPO 法人あーすわーむ(南、福江)

- ・ ドローンによるシカ個体数調査手法の開発(継続)
- ・ ライトセンサスによる牧場内のシカ個体数の長期モニタリング(継続)
- ・ イノシシ及びタヌキによるカーフハッチ、肥育牛舎の盗食防止対策の実験(終了)。

◎ 野生動物調査:麻布大学野生動物研究室(塚田)

- ・ カメラ・ビデオを設置による牧場内出現動物の種類と数の把握。(継続)
- ・ 天然記念物「ヤマネ」の生態調査(継続)
- ・ 電気牧柵による獣害回避効果を検討(継続)
- ・ ニッポンアナグマの生態調査 (継続)
- ・ 発信機による野生鳥獣の位置測定(終了)
- ・ 赤外線カメラを利用したタヌキの盗食被害の実態と回避策の検討(終了)

● 農研機構畜産研究部門(藤森・内山)

- ・ 新品種の永続性についての継続試験(ペレニアルライグラス、オーチャードグラス)

● 農林水産省所管の競争的資金「イノベーション創出強化研究推進事業」＜育種対応型＞
課題名:寒冷地・温暖地における高品質多年生牧草の育成と利用年限延長のための技術確立
代表機関:(国立研究法人)農業・食品産業技術総合研究機構 畜産草地研究所(上山)

● BLV(牛白血病)根絶のためのアブトラップの設置:(国研)農研機構中央農研センター、群馬県西部家畜保健衛生所

- ・ 各草地に捕集のためのアブトラップを設置し、経時的に捕集し種類を同定。
- ・ BLV 清浄化のための対策。

● 草地診断に基づく草地管理: 畜産草地研究所、県畜産協会

- ・ 草地の植生調査及び収量調査。
- ・ 飼料成分の測定。
- ・ ライジングプレートメーター法を用いた牧草採食量の測定。
- ・ 荒廃草地の追播更新試験。

● 山羊を使った雑草管理の実証試験: 家畜改良センター長野支場、上野動物園

- ・ 継続実施、管理地の拡大。

● ジャージー牛の乳生産に影響を及ぼす栄養要因とその制御機能の解明: 日大

- ・ 機能性成分 CLA 産生に対する大豆給与の効果(放牧によって産生される共役リノール酸の増強を大豆によってさらに強化できるか)

● 放牧牛肉の機能性成分: 九州沖縄農研センター

- ・ 放牧ジャージー牛肉の機能性成分の測定。
- ・ 牛肉の肥育様式と機能性成分の関係解明。

● 放牧牛乳のプレミアム化のためのデータ蓄積: 畜産草地研究所

- ・ 放牧ジャージー牛乳の機能性成分による高付加価値化。

- 堆肥発酵の促進技術の開発：畜産草地研究所(阿部・小島・山本・平野)
 - ・ インパクトエアレーション方式と廃菌床の利用による堆肥化試験の継続。
 - ・ 草地への施肥効果の試験。

- 神津牧場のジャージー牛の遺伝的変遷：東京農業大学(古川)
 - ・ 神津牧場の繁殖データを提供することにより、データベース化と創業以降のジャージー種の遺伝的系譜が明らかになった。